坂井市の伝説と昔話（一）　―語れるものに―

杤谷　洋子

はじめに

私の昔話の師である小澤俊夫先生[1]は「昔話がほんとうに存在するのは、それが語り手によって語られている時間のあいだだけなのです。ということは、語り終わると、昔話は消えてしまうものです。つまり、昔話は厳密に時間にのった文芸であるということができます。（中略）昔話のように耳で聞く文芸は、きわめて厳密に時間にのった文芸なのです。（中略）昔話を楽しむときにも、昔話を研究するときにも、あるいは昔話の絵本をつくるときにも、また昔話の再話本を作るときにも、このことはけっしてわすれてはならない基本的性質です。」（『昔話の語法』小澤俊夫著、福音館書店、一九九九年）といっています。又、「聞き手が聞くだけで理解できる文章でなければなりません。それは簡潔な文章でなければならないのです。囲炉裏端で孫などに語りきかせてきたお年寄りたちは、孫や子どもがわかりやすいように語ってきました。そのために昔話は、いつの間にか、シンプルでクリヤーな文体になってきたのです。ところが現代のおとなは、子どものころ、祖父母から毎晩耳で聞いてきた経験がなく、昔話といえば、本で読んで知る話に他なりません。従って、耳で聞かれてきたシンプルでクリヤーな文体ということ自体を知らないのです。そういうおとなが昔話を、著者として、あるいは編集者として、本で読まれるお話に仕上げるので、昔話らしくない、描写的な、あるいは感情移入的な文体にしてしまうことが多いのです。私は、昔話の文芸的研究をしてきた者として、昔話を、本来の、簡潔で明瞭な文体の姿で次の世代に渡したいと思っています。それは、昔話研究の開拓者である柳田国男先生と関敬吾先生の思いに確実に通じています」（『昔ばなし大学ハンドブック』小澤俊夫著、ＮＰＯ読書サポート、二〇一六年）。そのための勉強の場として一九九二年から全国で「昔ばなし大学」が開講されました。私は一九九三年五月から

第一期金沢昔話大学基礎コース・再話コース再話研究会、二〇〇〇年からふくい昔ばなし大学基礎コース、再話コース、再話研究会で学び、現在も小澤俊夫先生のご指導のもとふくい昔ばなし大学再話研究会で仲間とともに昔ばなしの再話の勉強を続けています。

私は子どものころ昔話をきいたことがありません。私は昔話に本の中の活字を黙読するという形でであいました。まさしく現代のおとなの代表的存在でした。

私は小澤先生から昔話について教えを受けるうち、福井のこの土地でうまれた先祖たちの想いや、生き方、メッセージがつまっている伝説や昔話を語る人がいないということにおもいいたりました。それは本当に残念なことです。脈々と語り伝えてこられた大事なものを、この時代でとぎれさせていいはずがない。

語る人がいないのなら私が語る人になろうと密かに決心しました。ところが、語ろうにも適切なテキストがありませんでした。文献を調べてもとてもそのまま語れるものではありませんでした。小澤先生はこうも言っておられます。「語り手はみな再話者である」本当にそうだと思います。

私は長年勉強してきたことをいかして、先輩たちがのこしてくれた福井の伝説や昔話のかけらを集め、語り手が言葉で語り聞き手が耳でことばを聞いてイメージをひろげておはなしが楽しめるものに再話し語っていきたい。

今回は、その中から丸岡鳴鹿地区の伝説「籾佛」を再話過程も含め報告します。

一　文献の中の「もみ仏」から原話にするものを選ぶ

○『**鳴鹿村誌**』

伊東尚一編、鳴鹿村、一九五二年

・第九章 口碑傳説「籾佛」

秋の中頃はさばに稲がかけてあつた。或る朝早く起きてはさばの方を見ると、何かぴか〳〵光つているものがある。ふしぎに思つてそばへ行つてみると小さな一粒の籾であつた。手に取つてよくよく見ると籾殻が二つに開いて、中の米粒が仏になつて光つているではないか。一粒の米にも佛が宿るという御教えに違いないと、それからはお米を大切にすると共に篤く崇めていつた。この籾佛は日によつて向きをかえることがあるという。上金屋土肥家に今も安置されており、遠近の人々がよく拝みに来るという。

○『**越前丸岡の民話と伝説**』

岩崎新之助編、築城四百年記念祭実行委員会、一九七九年（初版一九七二年）

・鳴鹿地区「もみ仏（上金屋）」

すでに秋はたけなわで、田んぼは黄金の波が揺れていました。はさばには稲がかかっていました。

ある朝、早く起きてはさばの方を見ますと、何かぴかぴか光っているではありませんか。不思議に思ってそこへ行って見ると光っているのは小さな一粒のもみなのでした。手にとってよくよく見ると、もみがらが二つに開いて中の米粒が仏様になって光っ

ているのです。

この家の下女は米を粗末にしていて、はさばにこぼれているもみも拾おうともしなかったのです。一粒の米にも仏が宿るというお教えに違いないと、その後は米を大切にし、もみ仏を篤くあがめました。

こうして、どのくらいの年月がたったでしょう。今も上金屋の土肥家に安置され、もみがらも、もみ仏も少しの損傷もないのですから不思議というほかはありません。このもみ仏は、日によってもみの中に正面を向いておられたり、横向きになられたり、もみがらの上にすっかり上っておられたりして、向きを変えられるのです。

現在も遠近の人々が、よく拝みに来られるそうです。

ふたつのもみ仏を読み、『**越前丸岡の民話と伝説**』岩崎新之助編、築城四百年記念祭実行委員会、一九七九年（初版一九七二年）に掲載のものを原話とし語れるものに再話していくことにしました。

二　テキストを整える

（一）土肥家ともみ仏とについて

私は子どものころ、ごはん粒一つに仏様が三人いるといわれごはん粒が茶碗にのこっていると注意されてきました。日本の歴史をみても飢饉で食べ物がなかったり、米を主食にできる時代はごく最近ではないかと思います。そういう庶民の暮らしの中から生まれた伝説のように思います。

地元鳴鹿コミュニティーセンター長辰川氏に紹介していただき、二〇一六年七月二十七日、上金屋の土肥家を訪問する機会をえ、もみ仏をみせていただきました。もみ仏はガラスの筒のようなもので保護されていて、拡大鏡がおかれていてのぞいてみるようになっていました。本当に米粒の小ささで拡大鏡をとおしてもなかなか確認することができません。同行した辰川氏が「見えた」というので、近眼で老眼の私は、今度は、裸眼で挑戦してみました。ついに正面を向いたもみ仏を確認することができました。

土肥家の奥さんによると、昔一度見たことがあり、その時後ろをむいていたので恐くなって片付けてそれ以来みていないということでした。辰川氏はこれは作り物ではないかという見解です。伝説というのは案外そういうものかもという気がしないでもありません。米を大事にしない使用人の心をいれかえさせたいという信仰心の篤い昔の大庄屋土肥三五左衛門の気持ちから作らせたものとも考えられます。もみ仏が後ろをむいていたり前をむいていたりというのはその人の心の反映でそうみえるのだろうとおもわれます。何しろとても小さいものなのですから。

実際に実物を見る機会をもって、子孫のかたに話を聞き、この伝説のどの部分を伝えたいか自分の中でかたまりました。

上金屋の土肥家については『鳴鹿大堰千年誌』（北山賢一著、私家版、二〇一〇年）で土肥家文書のことが記載。鳴鹿大堰と深いか

かわりがあり、十一世紀に上金屋に住居を構え、代々土肥三五左衛門となのった。十七世紀には丸岡藩領に属し大堰所の維持管理を司る井奉行であるとともに、藩の組頭（大庄屋）をつとめるなど、百姓でありながら苗字帯刀の特権があたえられていた、と記載されています。七月二十七日に訪問の時にこの事実についても現当主より話をおききしました。

今の土肥家の当主の意向。土肥家という実名をだすのはＯＫ。しかし、一般公開は、昔はしていたようだが、今はしていないしこれからもしないということでした。

（二）原話の分析検討―原話を段落にわけて問題点をみつける―

段落１

すでに秋はたけなわで、田んぼは黄金の波が揺れていました。はさばには稲がかかっていました。

段落２

ある朝、早く起きてはさばの方を見ますと、何かぴかぴか光っているではありませんか。不思議に思ってそこへ行って見ると光っているのはちいさな一粒のもみなのでした。手にとってよくよくみると、もみがらが二つに開いて中の米粒が仏様になって光っているのです。

段落３

この家の下女は米を粗末にしていて、はさばにこぼれているもみも拾おうともしなかったのです。

段落４

一粒の米にも仏が宿るというお教えに違いないと、その後は米を大切にし、もみ仏を篤くあがめました。

段落５

こうして、どのくらいの年月がたったでしょう。今も上金屋の土肥家に安置され、もみがらも、もみ仏も少しの損傷もないのですから不思議というほかはありません。このもみ仏は、日によってもみの中に正面をむいておられたり、横向きになられたり、もみがらの上にすっかり上がっておられたりして、向きをかえられるのです。

（問題点）

段落２…主語がない。

段落３（この家）とはどの家？上金屋の土肥家？

段落４（一粒の米にも仏が宿るというお教えに違いない）と思ったのは誰？

（その後は米を大切にした）のは誰？下女？

（もみ仏を篤くあがめた）のは誰？

（三）「物語文読みの観点」

―中島正人[2]に照らし「もみ仏」の内容の分析をする―

（テキストをみる観点）

① どんな人物がでてくるか（登場人物）…自分の意思で動くもの

② 中心人物はだれ？（主人公）のとらえ

・作品の中で気持ちが一番大きく変化した人物

・大人になっていく
・主語・会話文・気持ち・行動・様子がたくさん表現されている
③いつのことか？（時）
④場所
⑤事件と変化
・何がかわったのか
・どんなことがおこったか〈事件〉
（あらすじをおさえていく）
・話の中でかわったことは？（どんな小さな事でも）
⑥話の中で大きく変わったこと〈クライマックス〉

「もみ仏」を観点にてらし考える

①登場人物
・土肥三五左衛門〈大庄屋〉
・男衆や女衆
・米をそまつにしていた女
②中心人物
・米をそまつにしていた女
③いつのことか？（時）
・ある年の秋、
・ある朝、
④場所
三五左衛門の家、
はさば

⑤事件と変化（あらすじをおさえていく）
・三五左衛門は米を大切にするようにいうが、ある女が粗末にする。
・はさばの一粒のもみがぴかぴかひかり仏の姿になった〈もみ仏〉
・もみ仏は女が見ると後ろを向き、三五左衛門がみると正面を向く。
・もみ仏の噂を聞きみんながおがみにくるが、日や人によって前を向いたり横向きになったり後ろをむいたりする。
⑥話の中で大きく変わったこと（クライマックス）
・一粒のもみがもみ仏になった。
・米を粗末にしていた女が、もみ仏をおがんだことで大切にするようになった。

（四）昔話の語法にのっとり構成を整える、

・この話は伝説なので地名と名前は正確に。土肥家は歴代三五左衛門なのでこの名前もきちんといれる。
・発端句がかけているのでおぎなう、
モチーフ・構成〈ストーリー〉
①発端…話の背景・季節〈場所と時〉
②はさばで何かが光っているので見ると一粒のもみで中に米粒が仏さまになって光っていた。
③この家の下女のひとりは米を粗末にしていた。
④一粒の米にも仏がやどる。という教えと思いあがめた。その後米を大切にした。
⑤もみ仏は、今も上金屋の土肥家にある。
⑥もみ仏は日により、前をむいたり横向きになったりとむきをか

える。

⑦結末　今でも人々がもみ仏をおがみにくる。

三　共通語に再話する

『もみ仏』（丸岡町上金屋）

再話完成日・二〇一六年八月四日

原話・『越前丸岡の民話と伝説』岩崎新之助編、築城四百年記念祭実行委員会、一九七九年（初版一九七二年）

再話者・杤谷洋子

昔、丸岡の上金屋に土肥三五左衛門という大庄屋がありました。その家にはたくさんの男や女がはたらいていました。

三五左衛門は、いつも、

「米を大切にしなさい。はさばの下におちてるもみ一粒でも粗末にするものではない」といっていました。

けれども、一人の女は、

「この家は大庄屋でたんぼもたくさんあるしこんなにたくさん米があるんだから、落ちているもみまでひろわなくてもいい」といって、みんなが、はさばの下にこぼれているもみをひろっていてもひとりだけひろおうとはしませんでした。

ある年の秋のこと、その年も豊作で稲刈りが終りはさばには稲がたくさんかけられていました。

ある朝、三五左衛門は早く目が覚めたので家の外にでてなにげなく、はさばの方をみると、なにかぴかぴかひかっていました。

（なにがひかっているのだろう）と、不思議に思ってはさばのそばへいって、よくみてみると、小さなもみが一粒ひかっているのでした。

ひかっているもみを手にとってよくよくみてみると、もみがらが二つに開いて中の米粒が仏さまになって光っているのでした。

（これは一粒の米にも仏がやどるという教えに違いない）。

三五左衛門は、もみ仏を家に持って帰り大切におまつりしました。そしてうちのものみんなでおがみました。

はさばのしたにおちているもみをひろおうとはしなかった女も、このもみ仏をおがもうとしました。

ところが、女がもみ仏をみるともみ仏はうしろをむいていました。女は三五左衛門に

「だんなさま、このもみ仏さまはうしろをむいておられるのですね」といいました。

三五左衛門がみてみるともみ仏は前をむいていました。

女はもういちどもみ仏をみましたが、やはりうしろをむいています。

女は、はっとしました。みながはさばのしたにおちているもみを、ひろっているとき、いつもひろおうとしなかったことをおもいだしました。それから女は米を大切にし、皆といっしょに、はさばのしたにおちてるもみもひろうようになりました。

このはなしをきいて、大勢の人が遠いところからも、もみ仏をお

がみにくるようになりました。
もみ仏は見る人や日によって、前をみていたり横や後ろをむいていたりするのだそうです。
このもみ仏は今でも上金屋の土肥家にあるということです。

四　私の福井弁に再話する

『もみ仏』（丸岡町上金屋）
再話者・朽谷洋子（前記共通語の再話を私のことばに）

昔のぉ、丸岡の上金屋に土肥三五左衛門ちゅう大庄屋があったんやといの。
ほの家にはぁ、ようけと男衆（おとこし）や女衆（おなこし）がはたらいていたんやと。
三五左衛門は、よぉお、
「米を粗末にしたらあかんのやざ。一粒のもみかて大事ぃな米やさけんての」ていうてたんにゃと。
ほやけどた、一人の女衆は、
「こんのちはぁ、大庄屋で、たんぼかてぎょうさんとあるんやし、米かてようけとあるんやさけんて、はさばの下に、落ってるもみまでへろわんでもいいんでねいけの」ちゅうて、みんなが、はさばのしたにおってるもみをへろててもひとりだぁけ、へろおうとぉせんかったんやってぃの。
ある年の秋のこと。ほの年は豊作で稲刈りもおわって、はさばにはぁ、ようけと稲がかけてあったんやってぃの。
ある朝、三五左衛門はえろ早うに目がさめたさけんてに、家の外にでてぇなんのけなしに、はさばの方をみたんにゃとの。ほいたら、なんやぴかぴかひかってたんやといの。
不思議に思てはさばのそばへいって、ようみてみるちゅうと、ちぇえもみが一粒ぴかっぴかってひかってたんやぁと。
ほのもみをお、手にとってよーぉおみてみるちゅうと、もみがらが二つにわれて中の米粒が仏さまのなりにになって光ってたんやといの。
（あーあ、もったいない。これはぁ一粒の米にも仏がやどるちゅうありがたい教えに違いねいわの）
三五左衛門は、もみ仏を家に持って帰るっちゅうと、うちのもんみんなでおがんだんやってぇの。
あのはさばのしたにおってるもみをへろおうとせんかった女衆も、このもみ仏をおがんだんやとぃの。
この女衆がもみ仏の顔をぉみるっちゅうと、もみ仏はうしろをむいてたんやと。女衆はびっくらこいて三五左衛門に
「だんなさん、このもみ仏さまはうしろをむいていなさるんやねぇ」ちゅうたんやと。三五左衛門がもみ仏をみるっちゅうとちゃんと前をむいてるんやと。女衆がもみ仏をみるっちゅうと、やっぱしうしろをむいてるんやとの。女衆は、はっとして、今まで、はさばの下におってるもみを、へろおうとせんかったことを、おもいだいたんやと。
ほでからっちゅうもんはほの女衆も、米を大事にしるようになっ

て、はさばの下におってるもみも、みんなと一緒にへろうようになったんやとの。

もみ仏のはなしをきいて、遠い在所からも、毎日、ようけの人がまいりにくるようになったんやと。ほやけどた、拝む日ぃや、拝む人によってもみ仏は前をむいてたり横をむいてたり後をむいてたりしたんやってぃの。

このもみ仏は今でも上金屋の土肥家にあるっちゅうこっちゃ。

おわりに

坂井市の伝説と昔話を語れるものに再話し、語るきっかけとなったのは、二〇一六年ケーブルテレビ坂井市の広報番組『坂井さんちのこっしぇるじぇ』の中で『坂井さんちのちょっと昔の話』という企画がスタートし、坂井市の伝説や昔話を毎月一話、私の語りで紹介することになったことです。

それまでも自分が住んでいる地元の伝説や昔話を語りたいとおもっていたのですが、元となる資料がなかなかなく、又伝説的なものが多く、簡単な短い記述のものがほとんどという中、手をつけられずにいました。

この企画を機会に坂井市（丸岡町・坂井町・春江町・三国町）の伝説や昔話を合計十四話語れるものに再話しました。この間、それまでの持ち話一話を加え十五話が二〇一六年二月～二〇一七年三月に放映されました。又、二〇一八年六月現在、坂井市のホームページから二〇一六年八月～二〇一七年三月放映分の六話がみられます。「もみ仏」は十一月放映なので、パソコンなどから音声で福井弁の語りを聞くことができます。土肥家に安置されているもみ仏の映像もみられます。

註

（1）小澤俊夫（おざわ・としお）…小澤昔ばなし研究所所長、筑波大学名誉教授。一九九二年より全国各地で「昔ばなし大学」を主宰。季刊誌「子どもと昔話」を刊行。二〇〇七年ヨーロッパ・メルヒェン賞受賞。

（2）中島正人（なかじま・まさと）…小樽市教育委員会。絵本・児童文学研究センター（小樽市）二〇一六年七月、正会員ゼミ「子どもたちの感性をはぐくむ小学校国語科の指導」。